
彼、彼女と歩む日々

新参

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼、彼女と歩む日々

【Nコード】

N8066Z

【作者名】

新参

【あらすじ】

彼氏、彼女の間に起きる小さな出来事。その切り取られた小さな部分を一緒に覗いてみませんか？あなたはどんなパターンですか？

クリスマス生クリーム事件

「ねえ」

僕は美紀に声をかける。が、反応はない。

「ねえってば」

「何？」

美紀はいかにも機嫌が悪そうな顔でこちらを睨む。

「まだ怒ってるの？」

「怒ってないよ」

「いや…。まあいいや。それじゃあなんか話そうよ」

「『まあいいや』って何？」

「い、いや…それは口が滑りました」

「だいたい、人が機嫌の悪いときによく『話そう』なんて誘えるね」

「やっぱり怒ってるじゃん…」

「怒っているときに素直に『怒っている』なんて言うやついますんから」

「だから、さつきから謝ってるじゃん。ごめん。僕が悪かった。」

かれこれこんな会話が30分ほど続いている。

今回の喧嘩の原因は、僕の好き嫌いに由来する。

今日は待ちに待ったクリスマスである。

今宵の夜、巷では「キャーキャーアハアハ」しているバカップルがごまんと生まれる日だ。

半年前、僕はその仲間入りを果たした。

正直言つと、付き合った人は何人もいたのだが、所詮10代のお付き合い。

今まで深い仲になったのはほぼ皆無である。

喧嘩も多いけど、美紀とはここまでうまくやってきた。

初めて僕の彼女、「美紀」と過ごすクリスマス。

今日は大学に入ってから一人暮らしをする僕の家に来ることになっている。

プレゼントも用意した。

部屋も掃除した。

なんかいろいろと用意した。

準備は万全だと、僕は確信していた。
今日は素晴らしい日になると。

午後6時、僕の部屋のベルが鳴った。
扉を開ければ、美紀が笑顔で立っていた。

正直僕も立：ry（割愛させていただきます）

とりあえず、彼女を部屋の中に入れて、きれいになったソファー
の上に一緒に腰をかけた。

彼女は羽織っていたコートを脱ぎ、持ってきた少し大きな袋の中
から何かを出そうとしている。

「今日は俊樹にプレゼントがあるの」
そう言っ て彼女が取り出したものは、僕が以前から欲しがって
いた時計：ではなくて、明らかに手作り と分かる、ワンホールのケー
キだった。

はい、ここで問題発生。

僕は甘かったり、くどかったりするものが好きではない。

もちろんケーキといった類も例外ではない。

生クリームがたっぷり塗られた、そいつはプラスチックのケース越しに僕を睨んでいる。

だがしかし、手作りのものに対して「甘いもの苦手なんだよね」なんて口が裂けても言えない。

ましてや、美紀が作ってくれたものである。

「これ作るのにかなり時間かかったんだよ。俊樹のためを思って作ったんだから」

はい、もう逃げ道はありません。

「全部俊樹が食べていいんだからね!!」

う・・・わあ・・・

僕の目が泳いでいることを悟られないよう、僕は少し大袈裟にリアクションを取った。

「うわっ、めっちゃくちゃうまさうじゃん。これくらいなら一人で余裕だね」

はい、自分で逃げ道潰しました。

どうする、僕、どうするよ？

「ご丁寧に使い捨てのスプーンとお皿を持参してくれた美紀は、さつさと準備を済ませ、もう一口目のケーキを僕の口の前に運んでくれる。」

僕は覚悟を決めた。

その忌々しき生クリームで身をまとったケーキを、思い切り口の中に入れ、全力で咀嚼した。

「味はどう？」

「ウン、スゴクオイシイヨ」

「本当？すごく嬉しい！！たくさん食べてね」

少しえづきながら、僕はこれまでの人生で最高の笑顔を美紀に見せた。

「これまたご丁寧に、美紀は僕がケーキを飲みこむのを待つては、次に口へ運ぶケーキを準備している。」

「美紀に悟られちゃだめだ、悟られちゃだめだ、悟られちゃだめだ……。」

その気持ちだけで僕はひたすら咀嚼と流飲を繰り返した。

だがしかし、口に運んで10回目頃だったろうか。
僕の目から何かが流れた。

「えっ、俊樹どうしたの？」

そのとき僕は気付いていなかった。

僕は泣いていた。

彼女の気持ちがつれしかったから？

一理あるかもしれないが、そのときの僕の理由ではない。

もう限界だった。

これ以上食べたら、胃の中のものを全て現実世界に戻してしまうに違いなかった。

「ごめん、本当にごめん。実は生クリーム苦手なんだ…。」

その言葉を皮切りに、僕の涙は止まらなかった。

僕の涙が止まるころ、残ったケーキは全て美紀が食べてしまった。

「どうして苦手なら最初から言わないの!？」

「せっかく美紀が作ってくれたものを、『無理です』なんて言え

ないでしょ?」

「言い方によっては、お互いに納得のいく解決策があったかもしれないじゃない」

「少なくとも僕は、あの短時間でそれを見つけることは出来なかった」

「そういうことを言ってるんじゃないの。ああ、ケーキなんて作らなければよかった」

「本当にごめんってば……」

そこから美紀は黙りこくつて、今に至る。

話しかけても無視、あるいは簡単な返事だけである。

そりゃあ、そうである。

自分が一生懸命作ったものを、決して感動ではない涙を流しながら食べられるなど最悪の極みである。

僕も普段はすごく頼りないが、今は男になるべきだ。

僕はベッドに腰掛ける美紀に背後から近づき、ゆっくりと抱きしめた。

一瞬、振りほどかれるかと思ってドキドキしたが、そのような素振りを見せなかったので、僕は全力で美紀に謝った。

「本当にごめん。美紀がせっかく作ってくれたのに、食べきれなくて。」

「一生懸命作ったのに…」

「知ってるよ。だから僕は全部食べようとしたんだ。自分の嫌いなものとしても、美紀が作ってくれたものだったから一口も付けずに返すなんてことはできなかったんだ。」

美紀は僕の腕の中で小さくなる。

「嫌いだって知っていれば、作らなかったんだよ」

「それもごめん。普段から甘いものは避けていたから、言うタイミング逃しちゃっていて。言い訳がましいからこれ以上言うつもりはないけど、これから嫌な食べ物があればすぐに言うよ。」

美紀は僕の腕に顔を押し付けた。

その姿が愛しくて僕はすこしきつく抱きしめる。

「もし作ってしまったものなら、全部文句言わずに食べきれような男になるからさ、ね？もう仲直りしようよ」

「今度からあたしも甘いものには気をつける」

美紀は目元を拭い、僕の方に向き直り…。

その後は僕のプライベートなので、あえて伏せておく。
その後の夜は長い。
皆さんの想像に任せるとしよう。

あともう少しで、ジングルベルは鳴りやむ時刻だ。

隣で眠る美紀の顔は、あらゆる差し引きをしても…かわいい。
これは僕だけの特権である。

些細なことで喧嘩はするけれど、なかなか順調なお付き合いだ。

いつの日か今日のことが笑い話にできたらなあ。
そんなことを思い描きながら、美紀の手を軽く握り、僕も目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8066z/>

彼、彼女と歩む日々

2011年12月25日20時54分発行